

梅谷文夫名誉教授年譜

昭和五年八月二十三日、東京府東京市麻布区筈町九十六番地に生まれる。父万造。母イチ。第三子長男。名文夫は鎮守麻布一本松水川大明神から授かる。同年中、筈町二十八番地に移居。

昭和九年、近所の標札を見て漢字をおぼえる。

昭和十年、ラジオ・レコードで落語をおぼえ、口真似する。三輪車で遊んでいて、後退してきた自動車の下にはさまれる。

昭和十一年、講談社の絵本定期購読。五目ならべ・はさみ将棋をおぼえる。

昭和十二年四月、麻布区立筈尋常小学校入学。同二十九日、天長節の式に出席して紅白の落雁をもらい、学校が好きになる。

○めんこ・びい玉をおぼえる。

昭和十三年三月、優等賞を受ける(以後毎年受賞)。四月、小遠足(青山墓地の乃木大将・広瀬中佐の墓に詣ずる)。○猫の四足をつかんで背中から落とす、どのくらいの高さまで体を入れかえることができるか、実験する。また、大人から猫のひげを切ると真直歩けなくなると聞き、実験してうそと知る。竹馬・凧あげ・けん玉をおぼえる。

昭和十四年四月、鈴木翠軒門下福岡氏書道塾入門。また、図書館に通いはじめ、講談社の少年講談を耽読する。八月、六年生と喧嘩して勝つ。復讐に備え、五寸釘を線路に置いて市電にひかせ、それを研いで槍を作り、その槍をかついで遊びに出る。○坂道の下で待ち受け、通行の荷車の後押しをして駄賃一銭をせしめ、買い食いすることをおぼえる(当時は子供に月決めで小遣いを与える習慣はなかった)。また、自転車・べいごま・がちゃんこをおぼえる。

昭和十五年一月、書初大会で金賞を受ける(以後毎年受賞)。

三月、皆勤賞を受ける。八月、昆虫採集をはじめ。昭和十六年四月、国民学校令により麻布区立筈国民学校に改められ、祝日の紅白の落雁、優等賞など廃止される。八月、模造飛行機の製作をはじめ。また、宮城・明治神宮・靖国神社におまいりすると称して出歩き、旧市内の地理にほぼ通曉する。十月、区内各校対抗唱歌会の選手に選ばれる。○とんぼの翅をどのくらい切り落としても飛行可能か、実験する。○甲虫におもりをつけ、どのくらいの重量まで飛行可能か、実験する。また、甲虫の翅を切断し、断面の形が飛行機の翼型

と異なることに疑問をもつ。歴代天皇の諡号を暗記する。囲碁・将棋をおぼえる。

昭和十七年八月、戦死者合同葬に男子生徒代表として参列。十月、修学旅行(伊勢神宮・橿原神宮に詣する)。○水泳をおぼえる。鶴亀算に興味をもつ。

昭和十八年三月、麻布区立异国国民学校卒業。四月、東京府立第一中学校入学(この年から四年制となる)。七月、都制施行により東京都立第一中学校に改められる。八月、神宮プールの十メートルの飛込台からの飛込に成功する。また、五十メートルの潜水水平泳ぎに成功する。○真面目に授業を受けず、よく立たされる。校友会雑誌に載った一年生の時の谷崎潤一郎の作文を見て感心し、美辞麗句を連ねた文章を書くようになる。

昭和十九年三月、一年生二百四十八人中二百四十八番の成績で及第する。びりで及第したのはそれまでに徳川夢声ただ一人しかないと聞かされる。四月、自由選択授業「妙法蓮華經」受講。また、必修授業グライダー操縦訓練はじまる。五月、校内の笑い話をあつめて、わら半紙一枚の週刊新聞を発行する。六月、中間試験の幾何で四百点中三百九十九点をとる。級友の見る目かわる。十一月、空襲時の学校の警備を命ぜられ、非常時要員の身分証明書を交付される。十二月、学徒動員令により授業停止、中央気象台報道課に配属される(月給三十円)。

昭和二十年二月、行列をまちがえて国民酒場の列にならび、はじめて酒の味をしる。四月、中央気象台配属を解かれ、麴町

区の焼跡の整理にあたる。神奈川県愛甲郡秦野町曹屋に移居。五月二十五日、空襲により斧町の家屋焼亡。七月二十九日、

横須賀海軍工廠深沢分工廠配属を命ぜられて現地におもむく途中、馬入川鉄橋上、大船の路上でグラマン戦闘機の銃撃を受ける。同三十日、入廠式。下士官のリンチが公然と行なわれているのを見てショックを受ける。寮生活中、退屈しのぎに短歌を作る。また、森鷗外『伊沢蘭軒』を読み、狩谷棧齋の名をしる。八月十四日、ベルセウス座流星群を見る。同十五日正午、第一工場前広場に整列し、無条件降伏の玉音放送を聞く。同十七日、横須賀海軍工廠深沢分工廠配属を解かれ、秦野町の家族のもとに帰る。当日の作「たがやして生くる覚悟と君は言ふ生きてむなしき国と思ふに」。九月、授業再開。

昭和二十一年二月、昭和天皇行幸の示達を受け、十二日から十四日まで、授業中止、校内特別大掃除が行なわれ、床板の隙間のごみまではじくり出す。行幸延期となり、同二十七日、再び校内特別大掃除。同二十八日、行幸。英語授業(シニエークスピア『真夏の夜の夢』)御視察。国語の時間に感想を書かされ、ありのままを御覧に入れるのが本当の忠ではないかと書いて提出する。五月三日、斧町の家屋新築成り、移居。六月、校友会が結成されることになり、理化部を創設して参加する。校舎西側三階便所脇に部室をもらい、化学の実験をはじめ。九月、はじめて生徒大会開催され、五年生学級委員から自治会結成の提案理由の説明が行なわれる。学校指導の自治会結成に反発し、質問の口火を切って五年生学級委員の提案をことごとく否決する。同月、中学四年制廃止され、

五年制にもどされる。また、高等学校の入学試験の合格発表が遅れて五年生として在校していた者たち、退校して、それれ高等学校に進む。○西洋の古典を読みはじめる。

昭和二十二年四月、六・三・三・四制施行により、二・三年生は新制都立第一中学校生徒となり、四・五年生は旧制都立第一中学校生徒となる。同月、学校公認の自治会委員選挙行なわれ、委員に選ばれる。五月、学友会議長に選ばれ、はじめて生徒だけで予算の配分を決定する。六月、理化部活動に地学を加え、中央气象台から天気図の配布を受ける。○謄写版印刷の技術をおぼえる。日本天文学会会員になる。

昭和二十三年三月、第一高等学校受験に失敗。どこがでできなかったのか、それがわからないことを恥じる。四月、新制移行により都立第一高等学校に改められ、三年生に進級。同月、新自治会準備委員会の設置を決議して自治会解散。六月、数学同好会を創設する。七月、学友会代表として創立七十周年記念文化祭準備委員に加わる。芦田均首相に後援会長を委嘱したい旨書簡を送り、首相秘書から丁寧な断わり状と金一封を受ける。十月二十八日から三十一日まで文化祭開催。数学同好会出題懸賞付パズルが好評を博す。○整数論に興味をもつ。

昭和二十四年二月、生徒大会開催。星陵生徒会自治憲章成立。

三月、全校単一選挙区制による生徒会行政委員長選挙が行なわれ、選挙管理委員を務める。同月、東京都立第一高等学校卒業。担任の所見「なんでもこなす能力があるのに、リーダーとして積極的に行動しようとしなのは遺憾」。五月、受

験勉強のつもりで読みはじめた金子元臣「源氏物語評釈」読了。七月、東京大学教養学部文科二類入学。八月、登山をはじめ。○蔵書千冊に達する。

昭和二十五年五月、中西進らと短歌研究会結成。雑誌「方舟」創刊。その縁で歌誌「アララギ」の編集を手伝うことになる。昭和二十六年四月、東京大学文学部国語国文学科進学。右遠俊郎・細窪孝らと近代文学研究会男爵会結成。雑誌「私小説」創刊。

昭和二十七年十二月、卒業論文「近世万葉集研究史考」二冊提出。

昭和二十八年三月、東京大学文学部国語国文学科卒業。四月、入学試験免除の特典を受けて東京大学大学院人文科学研究所国語国文学専修修士課程入学。柳井滋とともに国文学研究室勤務を命ぜられる。同月、東京都立南葛飾高等学校二部非常勤講師（漢文）を委嘱される。○秀英社版高等学校国語教科書の編集を手伝い、指導書など書く。江戸時代の版本・写本など集めはじめ。

昭和二十九年九月、東京都立日比谷高等学校非常勤講師（国語）を委嘱される。十月、学習院非常勤講師（国語）を委嘱される。十二月、修士論文「狩谷枚斎」二冊提出。

昭和三十年三月、修士課程修了式において人文科学研究所の総代を務める。四月、博士課程に進学。同月、学習院専任講師を委嘱される。○「狩谷枚斎宛松崎謙堂書簡の年時考証」（東京大学国語国文学会秋季大会研究発表）。

昭和三十一年四月、学習院高等科教諭を嘱任される。

昭和三十三年三月、博士課程単位取得、退学。

昭和三十四年五月、『波江抽斎』『寿阿弥の手紙』『小島宝素』

校注(筑摩書房版『森鷗外全集』四巻)。十一月、『北条霞亭』『霞亭生涯の末一年』校注(同上六巻)。

昭和三十五年四月十一日、吉田誠子と結婚。千葉県松戸市常盤平七丁目五番地に移居。

昭和三十六年四月、学習院大学一般教養課程非常勤講師(近代文学)兼任。

昭和三十七年四月、共立女子大学短期部非常勤講師(近代文学)兼任。同月、『近世文人の芸術観』(『国語と国文学』三十九巻四号)。十二月十一日、長男哲夫出生。

昭和三十八年三月、学習院高等科退職。四月、一橋大学講師(社会学部)に採用される。

昭和三十九年二月二十日、東京都日野市多摩平二丁目六番地に移居。三月、『From Sorai to Nankaku—The Development of the "Bunjin" Consciousness』(Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences, vol. 4 No. 1)。同月、『南郭以後—所謂文人墨客について』(『一橋大学研究年報 人文科学研究六』)。四月、『荻生徂徠—その文学者としての一面について』(『一橋論叢』五十一巻四号)。同月、『士大夫の文学』(『国語と国文学』四十一巻四号)。十一月、『狩谷校斎年譜考証稿』(『言語文化』一巻)。

昭和四十年三月、『金華稿副』考証(『一橋大学研究年報 社会学研究七』)。五月、『新しい文章への道はけわしい』(平凡社版『日本語の歴史』六)。七月、『波江抽斎』校注補訂(筑

摩書房版『森鷗外全集』四巻)。八月、『服部南郭の船晦—護園亜流の性格形成の一契機』(『一橋論叢』五十四巻二号)。

九月、『北条霞亭』校注補訂(筑摩書房版『森鷗外全集』六巻)。十一月、一橋大学助教授(社会学部)に昇任される。

昭和四十三年二月、『通(其一)』(『一橋論叢』五十九巻二号)。

昭和四十四年二月、『儒学と国学—富永仲基の位置』(三省堂版『講座日本文学』7)。

昭和四十五年三月、『棟堂の姫・其他—狩谷校斎年譜考証稿 其二』(『言語文化』七巻)。

昭和四十六年九月、『出定後語』の所謂享和二年再刊本について(『一橋論叢』六十六巻三号)。十一月、『波江抽斎』校注改訂(筑摩書房版『森鷗外全集』四巻)。十二月、『北条霞亭』『霞亭生涯の末一年』校注改訂(同上六巻)。

昭和四十七年四月、お茶の水女子大学文教育学部講師併任。七月、一橋大学教授(社会学部)に昇任される。九月、『釈放光「弁後語」の写本について』(『一橋論叢』六十八巻三号)。

昭和四十八年六月、『兼葭堂日記』複製と翻刻(『国語と国文学』五十巻六号)。八月、『出定後語』の版本(岩波書店版『日本思想大系』四十三)。

昭和四十九年二月、『富永仲基の所謂「五類」について』(『言語文化』十巻)。三月、『加藤周一「仲基後語』(『国文学』十九巻四号)。十月、『富永仲基論—「翁の文」をめぐる』(『国語と国文学』五十一巻十号)。

昭和五十一年四月、東京大学文学部講師併任。七月、一橋大学付属図書館小平分館長併任。

昭和五十二年二月、『慧海潮音「擱裂邪網編」の刊年について』

〔言語文化〕十三卷。三月、『偏』と『泛』—富永仲基の「五類」について（「一橋論叢」七十七卷三号）。同月、一橋

大学付属図書館長事務代理を命ぜられる。四月、同事務代理を免ぜられる。同月、お茶の水女子大学文学教育部講師併任。

昭和五十三年六月、『狩谷椋斎の学問と交友』（東洋文庫春期東洋学講座講演）。七月、一橋大学付属図書館小平分館長再任。

九月、『儒学と国学』（集英社版『日本文学全史』四）。

昭和五十五年二月、『椋斎雜記』（『国語と国文学』五十七卷二号）。四月、東京大学文学部講師併任。六月、一橋大学付属図書館小平分館長任期満了。

昭和五十六年四月、一橋大学大学院社会学部研究科担当を命ぜられる。

昭和五十七年二月、『椋斎雜記 其二』（『国語と国文学』五十九卷二号）。

昭和五十八年三月、『植松茂著「植松有信」一付、植松茂彦・植松茂共編「植松有信遺文集」』（『国語と国文学』六十卷三号）。

四月、お茶の水女子大学文学教育部講師併任。同月、東京大学文学部講師併任。十一月、『国学における学問的自覚—契沖について』（東京大学出版会版『講座日本思想』二）。

昭和五十九年四月、一橋大学語学研究室長を命ぜられる。十一月、金蘭短期大学水田紀久教授と『富永仲基研究』（和泉書院）刊行。

昭和六十年三月、『田藩文庫旧蔵無刊記本「冠辞考」について』（『言語文化』）別冊『増谷外世嗣教授追悼論集 言語と文学』。

四月、東京大学文学部講師併任。七月、『老後の生きかた—棟堂日曆』（国文学研究資料館夏季公開講演）。

昭和六十一年三月、一橋大学語学研究室長任期満了。四月、実践女子大学非常勤講師を委嘱される（以後毎年）。十二月二十四日、東京都日野市多摩平六丁目二十六番地に移居。

昭和六十三年四月、東京大学文学部講師併任。十二月、『椋斎雜記—津軽屋三右衛門襲名前後の事情 付、隠居の時期・隠居後の通称』（『言語文化』二十五卷）。

平成元年十二月、『椋斎雜記—津軽屋三右衛門襲名前後の事情 補遺』（『言語文化』二十六卷）。

平成二年三月、『儒学と国学』増訂（集英社版『日本文学全史』四）。六月、『新たに発見された「出定後語」の異版』（『混沌』十四号）。

平成三年一月、『日本人の美意識』（『UP』二百十九—二百三十号連載）。二月、『狩谷椋斎の西遊 其一 付、椋斎の出生地』（『言語文化』二十七卷）。

平成四年二月、『椋斎没後の津軽屋』（『言語文化』二十八卷）。

平成五年二月、『渋谷抽斎・吉田算墩・岡本况斎に関する雜記』（『言語文化』二十九卷）。十二月、『狩谷椋斎の西遊 其二』（『言語文化』三十卷）。

平成六年一月、『狩谷椋斎』（吉川弘文館人物叢書）刊行。同月、『津軽屋の支配人田脇儀兵衛』（『日本歴史』五百四十八号）。

三月、一橋大学退職。四月、一橋大学名譽教授の称号を受ける。